



新連載!

ンボモ村便り



日本で取引されている象牙は、遠くアフリカから運ばれてきました。とくに熱帯林に生息するマルミミゾウ（シンリンゾウ）の象牙は緻密で珍重されます。そのため多くのマルミミゾウが密猟され、IUCNレッドリストでは「深刻な危機（CR）」にリストアップされました。

ゾウの密猟の激しさに対処するため、ワシントン条約は国際取引規制に加え、2016年に象牙の国内市場閉鎖を決議しました。その後、象牙を売買していた国の多くは、国内法を改正して狭い例外を除き象牙取引を禁止しました。

しかし日本政府は「持続可能な利用がゾウの保全になる」という主張を変えません。東京都が2020年から2年余りにわたり開催した「象牙取引規制に関する有識者会議」でも、アフリカではゾウによる農業被害があるからゾウを殺して象牙を取引することはアフリカ人のためによいという趣旨の意見が出されました。

本当にそうでしょうか。農作物を食べに来るゾウを次々に殺して、象牙を売れば、有力者だけでなくすべての村人が豊かになれるのでしょうか。アフリカの中でも国や地域によって状況はさまざま、インドでもゾウと人間の対立（コンフリクト）は深刻です。そしてゾウと人間の共存に向けて努力している人たちがいます。

ゾウ害防除の方法として、サバンナゾウでは、畑を囲う柵にミツバチの巣箱をぶら下げる（ゾウが柵を揺らすとミツバチが執拗に追いかける）などいくつかの方法が実施されていますが、森にすむマルミミゾウの場合は、サバンナと同じではうまくいかないようです。村人が自らの手で畑を守り、またゾウと共存するための人間の側の課題を解決するために、今年度からコンゴ共和国のンボモ村でケーススタディとなるプロジェクトを開始します。

プロジェクトの進捗状況はこの会報でお知らせします。そして現地報告を通じて「日本が象牙を買うとゾウが保全され、アフリカ人が幸せになるのか」を問い続けていきます。

鈴木希理恵（JWCS 事務局長）



萩原さん

「マルミミゾウの畑荒らし防御柵」と「若者による野生動物と共存する村づくり」

～コンゴ共和国オザラ・コクア国立公園のンボモ村で二つのプロジェクトを実施します～

萩原幹子（JWCS プロジェクトスタッフ）

2022年7月

今年度の事業として、JWCSで上記ふたつのプロジェクトに助成金を得ることができました。

1. 畑の防御柵設置とコンフリクト緩和手段としての情報発信（公益信託地球環境日本基金の助成）

オザラ・コクア国立公園の南部境界周辺に広がるンボモ郡では近年、あちこちの村の畑がゾウ害に合っています。マルミミゾウが公園の奥深くからかなり村周辺に出てきているようなのですが、その理由はわかっていません。畑の被害はひどくなる一方で、主食であるキャッサバ芋が収穫時期の後にもかかわらず、もう不足しており、首都や近隣の町から運び込まねばならないほどです。政府も食糧援助をしています、一時しのぎにすぎません。村人たちの願いは「国に保護されているゾウ」に邪魔されずに、生業である農業をやって収入を得て、子どもたちを養っていくことです。

本プロジェクト現地責任者萩原は、2007年に同国立公園の北部で、エンジンオイルの廃油と唐辛子の臭いのする古布を使った柵により、マルミミゾウが畑に入るのを防いだ実績があります。公園本部のあるンボモ村一帯での畑荒らし問題に対し、公園当局が有効な手段を取れていないため、2021年に個人で同助成金を得てこの方法を試してみたところ、ンボモでもゾウの進入をふさぐことができました。そこで試験的レベルからもっと拡大してより多くの畑を守るため、今年度はJWCSの事業として助成金を申請し柵の設置を増やすとともに、対外的にもこの方法のメリット・デメリットをケーススタディとして情報発信する計画です。



細長く切った古着のシーツを
廃油と唐辛子に漬けて畑を囲う。

2. 若者リーダー養成塾によりゾウ害で脆弱化する村を活性化（自然保護助成基金の協力型助成）

上記マルミミゾウの畑荒らしは村社会全体の深刻な問題になっています。農作物による収入が絶たれる経済苦だけでなく、新しく畑を開墾する気力の喪失、また公園職員として雇われる人は一部のため現金収入を得られる仕事も無く、多くの若者はその日ごとに現金収入のある単発の仕事で食いつなぐ、事実上失業状態にあり、大麻を使用する者もいます。また10代からの出産と多産のため、若年層の人口に占める割合が高く、こういうところでは農作物の自給が重要なのですが、ゾウのために阻まれている状態です。

そこで本プロジェクトでは、若手リーダーたちが自ら村の課題解決に取り組み、それらの実践が家族単位で広がり、ンボモ郡全体に普及すること、そして国立公園周辺の地域コミュニティが安定することで、マルミミゾウをはじめとする野生生物の保全が継続されることを目指します。具体的には、地域のリーダーとなる、やる気のある若者に、ゾウの畑荒らし対策を行って農業収入を増やせるような新しい作物栽培などを実習できる場を設けます。若者たちからヒアリングをし、彼らの希望を聞き出すミーティングから始める予定です。



村の端の中学校脇の茂みに
夕方現れたゾウ（中央に頭）